新太閤記三編

下

へ13
4449
9

A13
4449
9

頼太平記操早引第三編巻之下

東都　松亭金水編次

第十五回

山田ちるそぶりのくちそ長しけれ。秋ぞそらもだや稀ふとへひと
さへぞうきぶ小舎のうちふ千代ハこそふ頼けられ是若とふ名のこ
血脈ゆへあるぬ男の妹ろ是ハ彩るゆゑの乳飛ひ手生
小唐ぬ塞ぐりて三回の角ハからりろぐろ食さへ彩るせろ
ろさふ教の色さへ例ろうび替らくと逢る日ハ義今ろひど

国の方より今に於て若夷の妻仕るまゝ仕るゞ此分の
恋明の[illegible]ざるあやの遊女いろふてゝ分の紫色を他ふ
知らせんおめへがうきき分のことを先まで忘やかくと
葉ごろもをもたろゝ女ちろの不仕るる
そもく此家の始といへるハ百五十六ヶ味ゆてあるべ
神酒こゝ仕ゝ米問屋の仕来といへるものゝ方へ
嫁入しけるゞ神酒ゞ二十四文のころ仕来世代さり
けるにあとといへるものあるべきよりて此を三んと

まへるゞ偽ゝおゝ疾しけるふ仕来ゞ世代さりを
いへるものハ此よりゝね男ゆゝく仕来ゞ世代さりを
俥米問屋を稱ものふせんとけれ孫ふ弟ノと入を神
酒もいまゞ年ゝるゞ仕方へ嫁入ゝ仕来ゞ世代ハ
ゝゞふ苗を弟ふ継せんとゝ云けるふ神酒ハ是を信ゝ
勿論此を続るハ血統もあるべ者も多ふ遠方ハ
ちゝ孫ども再び郷ふ法ゝるハ呼ものゝ家ありてハ百るれつけく
苗ハゞ仕ふハ神酒ゞ[illegible]の家

新麿が妻を彼岸と云ふ。ひめは長崎の地内へ移り住
下女と下男は附おけども切詰る定りなれて万事不自由
なる。殊に沖浦へ本店よりも是が結髪乳楽と
薬紙を乳除ふするぞうりを世の糸と目を送るおそき
天道は乃男を爵位福ひ〜是が偶ひとの二ぞふ
のまゝ花八が法教あく押除しる花魁の伝統花魁式
仮初の恋が仕く次第が辛り絶ふひ世を退けるが
も化が花八も見とりふりのあるぎまゝ花魁とふ

ふつけ。わ角ぐ多が入こり〜。未同座の様式と長へも教
すは孤意あり。長白こそ世長ふと枝春〜。内紙あく八
大分の金を拵く。未同座の仲ふる。左帯八ふ綾〜
ゞ。次帯八へ。おのゞ世ふるの殺法帯といふふその様を結
ゞ世。まこと花八八法元さ紀。その化るが列〜ゞ。
法元を持むとて。廓の支統を化せるが花八八歌
へく。高八宝ゞ我の体が二ぞ結ふを偽きて。流
花沖浦への実行も。年〜ふ減が寸ゞ。沖浦へ乃不

帳とこゝで。調子抜かぬを呼つけて。理解をいふ手を聞く
あんまだ。万る人音頭八が計らひゐる道べく狂言綺語
えしく隠居の安否を訊ざい。とも疎遠不通なれども。
かの末多端と六合日々に交りも浅き女。八百屋の前へ
支度て家こそ今度も機嫌がお前の多く彼是と。
半六がまかしたり
横より女房人のこゑ「安倍の晴明ひとりよひ。西門書園南方の上の有国
猫ひざ手ござ黄ちんド夏の見世も亡人まちノ。うまい見の矢

即座にさへ入るゝ。算木をとつけく十六文下さる者が出して呼
悪口を書つけて小言より。お千代は浴くとてちのぞ。下
女のお君をよびちよ「アノお君どんや。今買て来たものとアノ
買ておくまるなつて。へ、イくまこお前さん待くおいでとお嬢
おそぶりて困るものでござりますゑ。彼極るものが今の先
御まりますの。お止おそへ世が悪ござりませぬちよ「アア中から
あくいつても能ござる。アレモウさとく騒ぎじやアるいかる
「アお会計世話して占つて下駄ぢまし。ト逃出して。かのよひ

の文と算木を取て来り。行燈のお前へ広げて 多「サア御覧あそばせ ちよ「そしてマアやア何様するのでござへ 多「アノネ筮でござへますヨ。マアこの算木を中をよく頭で。願ひまするの念ずる。何でも天狗の思ふ所を念じて。本の上へ数ますのサ。左様してこの画へ合せまく。そこを外不手でまいるものを遠で見ますると。凶か吉かへが知れるとやますナニ左様耳くあたりかねてまません。夫ぢやア中るも八卦。あたらぬも八卦と申もじやアござへませんかね ちよ「夫では当にやアなりませんね 多「何様してお前さん。夫があてになりませう。夫ぢやア其様なことは大きうひがごとでござへますのサ。理を知るのでも。万一当ると出ますと。気にかゝりますものヲ ちよ「ホンニ左様でござへ。夫ぢやアお前もよしにお占ひな。万一悪く出ると否だから 多「お止あそばせヨ。気張お気のあるやうでござへますすれ ちよ「おかみやお前ハ例も至極元気でおいでなさるから ぞうしやうハヨ。何様しても左様いふ気になられるかしらねへ

なげ死ん

まるさうしの形ふ。先のきれまで考へて若旁みするのに。
まいみそんな恥ずかしいふけまで。何私も性質ぐらう
仕うとがるへいまで私くしやアまうと今まで。若旁といふい
行形なものぐらぐんじませんへ。是も大うとる家の中
でごぐらいまをうあく。ちうしーお前さんのやうな員は意
まーしうう。きぞ若旁でぐざいませうけまでも。ナニまうと
お前形が私しるう。ちう形る非義非理といふ良人ぐう。
先よりうけ方ううおさうぐでまうと程の豆実のあ

情の深い人ぐ良人ふいうーまます。たとへ名ばけ
らまきまーさうて。はあのみさん清けまぐ何ともうい
ともあ是ーいるみもぐざいません。私しやアまれるぐ千代
若旁とこうう。人の落ふ考うくさうぐ形る人ぐ
男形が業平の中うで。今の中ふ性うてまるやうるく
でもちう大形ひ。ちう君なるうみト方をぐうくと思る
いさうう。お千代い影を右門とうるも。彼や是ぬの中と
ちのて。ちう捨うまとちふう。お千代ぐうとう励まうて。

立所へ吟う京庶の所へ再び縁付ば双方ともによろ
らんと。ちのふて家の渋くいか千代もそれと板倉し
家ふりつとめる洞とかいおのへども板へあきこめる。
るのさくるこね温厚。女四人育の身のうへゆいこれふ
ちつくるた紅のまさあるべーこもゆつまこび。弱よ迎りて
人目さくちぬ涙を世紅ゆてたこまと云る藤の上
手だわくわぐひて完ふと。笑ふ眠のとふ寿ふくむる。
いろふせろるきころ相と。お儀さくあいまこあり。おこ三

おっ和のいふ西りこそまふ空ともちづひハあいけまで。私しも
今ハ表祝もる。唯一人の兄さんも。一昨年の秋稗世
て。今ハ浦牙の妻を京といふのが治を続くて居る
けまで。御ふ乙こそ乳の若るい人で。私ハ宅ふ居る
明ふろこ中のころい浦牙ぐろこで兄の秋家といふ
名だりで一年ふ二度ゆ三度。手紙の書えでもする
ぶんのこる。きそぐ〜〜ゆて居こ〜。此方が這般いふ
ふ解ふろこ又こと。りづき治後ハ祝家へ向る様よ

かりるうまも一ぴきのるまで行くこもるのいけどゞヤレ
密夫とゝさの猫奔をゝさのと。あなが法のてつくると。
ゝゝゝと言を噛で死ねだとゝて。所の容ゝと泣らまる
義理でもるのいと思へべ。実ふゝゝゝ今居回でまさん
の正を返出さまゝゝくゝるると。社不のるの身分サ。ゝ移る
るる弦も奉ゝゝ知ゝゝ形るゞゝよゝく紀ゝも仕るの
でまさんゞ後をゝゝく。今出く社とおいひのゝ。解まり
邪慳ゝと思ふけどゞまゝよく考へゝくゝると偽吉の

容ゝといひ。外の板も私の弗抵ゝゝ考ゝるへゞ。ゝんでも
おゝの細工ふちゞひるゝらゝと。ゝふのサ。そゝゞけどゞ
丈を云ゝゝゝくゝると。まゝゝ猴拓ゞのヤレ要名紙消さゝ
と思ゝく。罪もるのいのみ罪を被せるのといまゝて
ゝるゝと。まゝゝく私の身迫りふるゝゝ。清朴ふな
ゝゝ。猫ふゝ爺さんも彼ゝとゝ気をめんて下きるゝゝ
おまゝゝせゝて言けどゞ。考へゝるゞ不ゞ。嗚ゝく
ゝて考ゝゝゝゝゝゝゝゝ二分板ゝゝゝ思らうと。気が

ろく〳〵して家ヨロ〳〵丈八玉板は玄でございます。今体
いちでお茶板がころうございます〳〵。此板とみるうま
しく〳〵そうやアお茶がいえどもゴヨ。私ゥまゝ茶
ドいきぎよ
るの方ゥ者けやア。近ゥ永るふうりい仕まいけどど
ゥまで
なるも見へるいく〳〵。同板若旦那のお気やも今ので
わ
ゥ者〳〵丁百ゥ板りへ清汁をする人があるものゴろ。
つきまま
雑僕俳ゥて退出さのサ〳〵ヲヤア私一のゥを
のゥ方板ゴやアゴざいます。アノまさんがおまさんと時合

の出来と時分に。お茶板がゥまく〳〵作ゥ出をゴろ〳〵せて
お仕日ゥきとゴざいます。そをかまゥゴふお重拵ゴをものゴ
ろ〳〵。時〳〵女の方ゥも場がつゥく。程〳〵み悪いゥ成考へ
出すゥうに成ます〳〵。丈をヤのでゴざいます。まゴ形
やちやアお遊蔵のゥうでゴざいますけどゴ。お茶板のゥる
お方ゥが。度い世ゥるゥもゥ板泥山ありいく〳〵ません。井一
立摺鉢ハよ〳〵。汁椀ハよ〳〵。琴こ弦ゥゥ。番茶の湯まで
拵がして。そのゥへゥ良人さゥが作板ゥを拵ひとゥ

とも。藤姫を母うでゝ。後よりーーかゝごゝまゝ女ノ
ちよ〳〵ヲあゝ　雪みお菊ゞノウ。他を見るげんふひゆうーるのョ
るんで雪ゝの足にかゝらるゝへるゝっても。後まうゝ乳楽ご
ノウト。ゝゝまゝ女性の年生。お美ハ完ホ第弦金て
ゝゝアレ　ゝ花他もうもお乳よおうけ拝バーちやア雪でゝゝ
ゝゝ。ナニ　お花をひゆうーゝんのでゝゝまゝうトゝゝ
同志のものがゝうハ。森姫長楽も交殺ゝく。河の文の
あとゝ他のそゝハぬも再。わどけゝ。ゝゝ花の後ーーゝバ。

ゝ
所ーハ他ホ持りつ。お千代ハ泰山のおとゝ且弦今日ゝく
と待ゝゝ

第十六回

ゝ
夢ゝのあるゝバゝふ分を殺バ。流き涙ゝも流くゝゝるゝ。
ゝ　ゝーゝ　ゝ人情のおゝむゝ不今もむゝーも
見ハ往昔の去の業ゝ。ゝゝ
ゝゝりゝけゝバ分の夢ゝゝハ命ゝ之推元とおゝもゝ他ゝ。
ゝゝバお千代ハ出如ホゝりて。朝ゝゝゝホゝ六ゝゝ伝言伝をまつ
のゝゝゝ。他ゝ要ゝゝゝ分ゝゝゝ。洋ゝ移ゝゝ間もゝ。ゝゝ

こと
るの物よのこ。塞ぎて今い病とあり。芽くさし紙やせん薬も
せくくくとる会のうちいとぐ治ぶまて。死逃られぬ縁あり。
いつそこんでし世なる卿つて一筋の公根い衰まで始る初歩
の薬。ろくく沖縄へ薄紙をそろりとぬて内ふ入へ
ぐ薬物へ生も宜うノ。お前の病へ形気くく出るのごくく。
前後ふかまいと。生ゆ保者でもするまぐ生けまで。ろくへ
浄瑠璃でもやふお生とえても。そまさこ子ぐとふくく固くと
ものゴョ。自分お前の対にあつくくまぐ。夫も気へ多いけまで

うんがせでも。たれ気を這く物ちやアいけるいるへバイあり
ぐくりでぐのまそ。私もたれぐんぐまそうぐ。石思れのるれ
ふへんとろ。まこと私のゆくる不来ものそおろふ合ものいろそを
新源と五作あくう捨て方もぐぐ負ませんが。えいも考るへえとつけ
らまくくこのぐ漢ふ物者でありませんくく。ここ考石のあけ
ものいくちへ死ぬものへ死ぬまぐ。沖縄の因果くと思ひまそと。後ふ
関塞でまつくありませんと。階ものくふむ材ものくのとへ
たくくと。苦を涙のいぢくくさ。旅の沖縄も苦ひ泥　ホン二

風つよくものさびお前ふかしくらまぐ閉塞せる雰ごとおもひ。
今日までに雪をくさ拾ひが行孔も私も若旦方ふるうく宝入
ゆる宝金ゆを受入ふ徒てゐると。そのお宝とゆ〳〵云女ゞ宅へ来て
拾ふゆうと。バテナ此方の元も分るので。行孔いふ〳〵解ごろと
見さえ来を。ゆのさ有ゞ大きふ見さんの。出入の遠ひさるのゞ
あつく。風ひく拾ゆさるのサトゆのてお手代い箱よ情き。賜れハ
自ら嬉こともさてハ又ゆ来お宝ふ因服ゆるり。金石を負〳〵く
逃樹ふ良人の郭暦ふ引うこて巻山の長郎とこせるも拾る

いひ云かハ甘〳〵拾云とハ。今こそおのひ走〳〵逐ぶ。小首傾げく
ゆひ。ひぐるかゞ見まち。者伝待〳〵中愛も。ゆうき。人の出い彩だり。活ちき
ゆのる情ゆ。ゆ〳〵ゆ〳〵いゆく寒ぐる胸を押カさ人ゆ〳〵ふ弱も
黒る面持を。見るふ心もかゆ。細るおゆひを把み伝〳〵て。
サア〳〵ゆ〳〵といふハ。見さんのんでハ行でも吸ふ遠ハ有るまい。
大孔〳〵て人まハ待者をひどい見ふ変〳〵て紀〳〵。四いろ
黒いろ多解らゆと。文〳〵へ多紙ゆて。時んゞ有ゞ待者。行孔
いふ〳〵けゆ逃さきゆ。大孔〳〵て。逐奔ゞ。見〳〵ふいゆく

遠ひゐ〳〵さろたりと親孫してお主と為へ主をうとも。
家がつのもの乃和。そ主めへ仲ふ主人もあり。あらぬさも
云ふ者く。ゐく客ゐ貝孫ふ二主日迄うゝ来て居ると。ゆそふ
和もがつうりて。ふ者ふ云のを主重なのをも。見さんみ紙ゆ〳〵
こゝ主親孫ふ為まりでも主ゐ名とび抜ゆうふ主てふうる
さゝと主てふ来こが。行公の伝吉ゐ居ゐく為てふ主ゐ紙ふ
あゝり主て
紙門と主ゆうとゆふがゐ戸ゐ為と抜ゐるめ。丈ゐつ主代
よくゆゐる。ゐゐ者ふけ主ふ者もゐゐゐまで。行和ゐるゐがあらうとも。ふ

乳紙おきそぶ主ゆふゐ乳を天さゐのふ主ぶ。ゆ主て乳
ゐるふゐる。たゐ羽主ゐ日親孫ふ為ゐ。ふ者の乳くゐふとゐふ主。
山和ゐ為ゐく乳ゐ。今乳ゐて不自由ふ。常ゐ主ゐ乳ゐる。
ふ者一個の為紙行ふゐうで。もゐて来ゐうゐ。名入れと強く
為ゐく。早く病乳ゐ腹痛ゆ主ゐに乳と把ゐて居ゐ主ゐト伝
実ゐ乳ゐる肉の湯ふ千代ふゆて嫁ゐ。まゐ主ゐ湯ゐ主一雷ふと
特母高くふゐ主ゐ。まゐ主親と主ひゐ主ゆ主ば。ふ者と主ゐ主ゐ人の血
脳ふ今ふ乳もあ主ゐ流の系の。ふ者の如ゐふ乳ゐ便ゐと世ゐ為ふゐり

て指ゝ見しも甚まで。特と切なる恭ぶさえ。公の愛る人の手生
沙ゝく拙ハ女のゝ。血孫と拵て紀人の性分と。世話ふせんとい
ぶつ
美味なること。先の先まで業。いる。酒と粧ふ渋金と。せど
やとおも人さへ。なぐゝの格の格拵ぢて甲斐ある紀かひひ
めハいとど病もますゝぐ。うつと姿も見ふ流く。裏へ沈ゝも
無れる見と拙の渋流ハ血成つけく。お千代ぐ紀ゝ思めけ。
いさ
痛ゝるこの伝実ある見で。病ハ気弊の底ゝ生て移くれ
かも
帰りゆけで。今ハ宮果ゆも持医ぐく。医師いえゝかれ

初稿あるひハ名奥様度汁ゝ涙ゝ流ゝ。
岩ひ流さゆや。行見もおゝの利目ゝく。ぜスぐゝ者も格
らぐ。さ見ぶ主ふも渋合て。お千代ぐ紀気ある乗ぶ紀へ。
要ゝき分解ハ意ての涙ゝ。まづ大病のゝ計ゝ。ゝ甚て
来るゝ宮ゝんと。文ゝ書ゝめて表書ハ。主六ゝ名を手ゝ。花御
とこのゝ書ゝ。ゝ行ゝ。生婚乗ゝ。病気ゝて。ゝ
恍ひぐゝく。万ゝ。ゝ特むゝの。過ゝの文も仮乗ゆく。
義理一遍の礼状と。紀ゝふけゝ。渋方ゝく。ゝ主ハゝ

夢ケ谷の火屋よ
純空が千代が亡骸と
あやーむ

世間のまゝにすま沖が出らくと思ておち代に対面せん。只沖浪と
お浪とのゝ儀を許しそでさへすれバ肴酒すしどもに帰て持を
かるき容子になりしが、思ひ返しよき智族もありけれど
娘お浪が心細さに何ふさへてへん出るもなく病細りしかバ千代
どふして只たゞ重きに涙の先ぶつかり流る。然ども病人ハ日々
重く成りて終に果敢なくなりしかバ早速八百屋へ人を
走らせ半六に内々知らせ、後の事ども頼まれ、親元より
て万の事よろ頼に侍むともちえれバ、今まで談合するにも及バず。

兎も角も葬送の手当をするが第一と、おち代が道へ
まで後さへども未来より離縁状を出さぬ妻の事なれば
八百屋の寺にて葬むる筈、沖浪が寺ハ本寺よりして至会
ざれバ表向ハ遠慮して、葬送の営もいたさず内証の事にて済
大造にもあるまじと、寺ハ其の世と違らずに儀律下女のお花が
寺へ送りて納むとし、さればこそ寺へハお花が婦りて葬
あつかバ手傳ふ為の舞ひ、彼方より手伝いて立会ふに睦ひ郎はお光が
料理へ持参の聖日の方々ゆ長屋の甲乙より六人その中に

うきさ
年老たる人ハ万るの世話と情を由井の内なる宝寺へ送り
ゆる。爲とて寺ハ大ハ形のやく。夜と続をこ導ってきて
ちハ一向ハ宗門ハ死骸ハ茶毘の烟りとなを宗門ハ
けきび。猫れを交れて墓ケ谷の大屋へ舁入とけとび。穢元ハ
出ぐ是ハ受けこう。必ずでも田舎の絶ぐ家ハ田も畑
けきび。稼ぎハ庫裏ハ内ぬき「サア純空新ぐ老人ぐ」
こぞよト。呼起さて元ぐ伸とと。眼をこすりく出ぐ
齢二十ばかりの。ぐ老ぐ大の男ゲ天窓ハ枕巻ハ傍ら

傍らハ新ぐ敷ぐ紙を敷ぐ。ぐ老ぐ
とつて今ハ老人ハ。ぐ老人ハ
ぐらぐうにぐ。ぐ老ぐ方ハ行ぐ
どもハ長ぐ右の袋ハ。ぐ老ぐ
ハ大屋へ入とやーぐう。佛さまハ男ぐ女ぐ
美ーいのぐ。ぐ老ぐ。ぐ老ぐ
わ〜ぐ。ぐ老ぐ。ぐ老ぐ
お号ぐ。ぐ老ぐ。ぐ老ぐ

まの字かへヨ。あゝし般若が了語で一躰も上りうえ「十二人と施
主の亡人も附て来まぜう手稲ろ錢を出しちやア比ねへなぜ
ナニやこちやア。種々なじやアねへハナ長屋の殺で拾ふ大勢人より
ざつくばらへ「左様之支まいまでも何様でも匠ぢやア。せんとおもし一躰
じやアつまられへト口の内で納め合ひかの早桶を引擡て。
火屋の内へ那ぶ長屋の人も湯ふつき戸へまで那で一躰済し
まづ穏亡の本施をもまりて「サアく是でかゝゆへかうそんなら
聖己判やア兵さ手れる骨揃ひ不来かでハお待んやし

やまとイヤ何方も内書方く。サア是からハ幽浮の不ふ極へなり丁へ
まり出さんと云ても。ぶ不ト世縁が生も可き人の道匠の道
を他国から又土びか怪しきせかるまで死を長厳の怪まけまバ是
もまく往まりかくて死屍ハ猫を拾いて桶ふかけろ縄を引
きり蓋とりてまがりつきあ手も。まさ年若き女の死骸元白粉
不夢まる焉田の猫不移り香のまぐ消ゆる梅花のかふり。
死屍ハ顔を見ろめ「アヽ自己も久しく此様な白ひを嗅ねへ是が
ナア せめての虫の息でもあらうる。まひにきた不人ハな口淡く

こはるゝ気みもあらうけれど。水より冷たく鞍とあつちやア。アあなた
ゆふ泥ノくトひつてあるさ。入く。桶より ごと引出す。
亡者の形と魂とつゝて居ろうーが呆れたい。ハテナどうも山
伯いへおぼえのある臭ぐ。分福生形と死臭とハ和歌の意
かのぐ。イヤ行れつゝも遠へれ。ちゝ。更ふ赤ちやア新参者
の地円ごとふのを合長ぐ性れ。ハテナアト 時分 組脇く見居
て居けるゝ。行れつゝも八百屋の娘お千代さんみれ遠れ行れ
つふ所で地円ゝ。遠ゝ見る多解ふ。ちつとゝやア必定此一件

ゝ。縛ゝ離郷れ。ちつとこのぐらうト云さ所が田舎ふやア。猶神
ゝと。死ふもあり。地円みて居やう。長ぐれ。ガスア文アやアアア
亮も角ふ。平亮云ひ。俳句合ふ眼が晴んで。標致とひ乳
ぐとひひ。十人物ての負実のふ。名名つけさ。ゝ万の罪。
ゝちまちひてその金を吸ふ。ふうち。去地ふも居ま
れ。法が出来。お負ふ天宮とくゝ。捨てのすに。殺亡の。
下働ふい。乳ぐ名れ。史せ。あるふ心死殺とまゝ。自己ぐ
ふゝけゝ。焼ゝひふ。ハテ不測ふ周縁ぐ。コウお千代さん

堪忍しなヨさアぜひ命死ぬまでも自己を恣にうつそのう。
夫といふもおのれが賞貸を忘れてしまふといふから欲に
今あつても絶交を構へより熱まで望どり悪法かいつし身の鼓ひ
コレは姿に新しく生る人に杓のふたく徒らあるがるを
拭とれべきも怖しきも毬栗天窓「ドレそんならべトニ一上つて。
髪を丁とより揚て痛の箒とお気々切まが。切るもつゞ
にお千代が眼腹痛くおろし箒の竹犯派の法に自然。
為ひしめのかうこと一変。花室絡きおきてへとこ気が

引さへ蘇生ろ。お千代さんへト呼で妻の耳へ口唇を
細くそひそいへ。怖りしろ此場の有様。死室あつゝ抱
きつゝ、耳に口よせ小声なあり「傷を清く無ぞ。此方八
墓参り谷の焼場どヨ。とだろうで只今解まへが、お前の死んで
ちつへ来さのご蘇生で、まさ種々咄しもあり法もある。
気をあつくりおあ宜へトいへまそお千代ハ心づき。夫あろ程で
来さの名や。至一有ても不審さ。「ちよ」へお前ハ髪結の伝吉さん。
まざも起伐が足を不足で死んざ故まで何様する気ぞへト

色〻と欲くもあるべくもあらず。出の書うるもまぎ紛さ。書き入ばくもあるべ
りなるべし。さて美女千代が義性。まことの赤い糸伝ふする。
第に編ふ要〻〻張て。金糸の紙面を見いるべし

閑窓新話 波奈賀多美 全本 十二巻

松亭金水作
五雲亭貞秀画

娘太平記之編巻之下 終

楊太真遺傳 精製桐の箱入

上廻女香 一週り 百二十文

そもそも此香は本朝無類の妙方にて男女小限らず顔の艶をうるはしく
して生まれ変りても生来の花小色を白く肌目細かなる功能あり志ら
ぬ者〻も此の茉莉の茉世百小多く白粉洗粉化粉水白粉油茉莉を製して皆
おとるべき者の業小なるものもこれを功能書小志るしてあれどもその書付の半
分も功能は依之此指揮を信じ見て
ものべき変りんが一度小なるべし一度
用ひるふてもも忽ち小功能の歇まる女茉莉一回り用ひるふて大体既の

色自然と桜の花のべくなり二遍り用ひるべし此極はせ荒疱の肌目も相二重絞のべさる様なりとなるのこのべ。ふさべ。そぞろ。腫物の跡。

まことの紅のべ。しも赤とうるくなりてうるはしくなるべ。諸合。朝起て顔を先あぎくやうに玉粧香をもり込てあべ。さて白粉を付るれば顔色もうるはしく自然素面の白くうるはしき様小あるべ。娘達方はいまだ及手をおさまる。達方が用ぬれども目小さべ。さべ。美くなる製法なれば用ひ拵されば真の美人となりなべ。

為永春水精剤

髪の艶を出し髪結をさるる

如薬 初みどり

あのあたりハ髪を結ハぬ小あるひ一ようしくなるとうの有

代三十六文

書物 絵入 読本 問屋

江戸京橋弥左衛門町東側中程

文永堂 大鳥屋傳右衛門

和漢軍書絵入読本 新古貸本類

吉本小品 沢山取持仕付売

格別下直 和働 其上中間不限

多少に御求下い根儀奉帝い以上

京橋南中通り弥左衛門町

文永堂 大鴻屋傳右衛門